

納富常天著『鎌倉の仏教』

中 尾 良 信

一

仏教の東国への伝播は、既に古代から多くの事例が見られる。しかし、東国の地で独自の繁栄を見せるのは、頼朝の鎌倉入府以降のことといえるであろう。平安時代の初め、南都の学問仏教に対して、新しい仏教を輸入標榜した天台・真言の二宗も、旧仏教化しつつあったこの時期、次々と新しい仏教革新運動を展開した祖師達、関東を訪れている。ある意味でその動きは、いわゆる新旧のほとんどの宗派を巻き込んだものであった。いわば日本中の仏教が、鎌倉を中心とする関東に流入し、有機的に関わり合ったといえる。

二

著者には先に『金沢文庫資料の研究』という成果があり、著者自身が三十余年間にわたって勤務した、神奈川県立金沢文庫の所蔵ないし保管史料に基づくこれまでの研究成果については、ある程度まとめられている。その第一編が「東国仏教と金沢文庫」と題されているように、金沢文庫そのものが東国における仏教の趨勢の重要な

位置にあり、著者自身の興味も、その点を十分に意識していることがわかる。

金沢文庫は、国史・国文・国語・儒教・社会経済・美術など、多岐にわたる史料を蒐蔵しているが、その中核となるものはやはり仏教関係の史料であり、さらにそれは真言・天台・華嚴・戒律・法相・三論・浄土・禅など、新旧両仏教の大半を網羅しており、また唱導・声明などをも含み、まさに中世史料の宝庫と呼ぶにふさわしい。それらの史料は、金沢北条氏が経営した金沢文庫と、中世の学山として繁栄した称名寺に所蔵されたものからなっている。従って、その史料の状況そのものが、中世の鎌倉、ひいては東国の仏教研究の実態を、かなり克明に伝えるものと思われる。個々の史料の調査研究については、いまなおその途次にあるが、著者の長年にわたる史料研究の中で、東国仏教全体の把握ということがその関心事となったことは、ある意味で当然の帰結ともいえよう。

それでは日本仏教史研究の中で、東国の仏教史の研究がどれほど為されているかというと、決して十分な状況とはいえない。ある宗派の動向として、ないしはある僧侶の行実を考える上で、鎌倉を含

む東国でのことが研究されることは、必ずしも少ないとはいえない。しかし、鎌倉を含む東国というフィールドの中で、いったいどのような仏教が展開し、どういう僧侶が徘徊し、そしてどんな形で東国社会と関わったのか、またそれが全国規模の仏教史にどういった影響を及ぼし得たのか、といったことは、これまで総合的研究成果が提示されたことは、あまり無いように思われる。

右のような点について、ある事象に関する史料を検討していった時に、その結果を次の研究に反映させる方法として二つのことが考えられる。一つは同じような事象に関する史料を発掘して比較研究すること、もう一つは史料の語るところに従って、その事象が展開していった方向にある史料を求めるか、逆にその事象の淵源を語る史料を求めて、その過程について歴史的に研究するということである。つまり、いくつかの点を比較検討することで、一つの事象を解明するか、いくつかの点を結ぶことで、歴史的展開を考えるとというようなことが、概して採られる研究方法であらう。

そうした方法とは違った形の研究方法として、ある地域の中で史料調査をすることで、歴史全体の流れの中でのその地域の独自性、といったことを解明することがある。いわば自治体史の編纂などが、これにあたるといえよう。しかし、自治体史は市町村単位とか県単位とか、行政区画に制限を受けることで、歴史全体に対する役割りなどを解明するには、巨視的な議論になりにくいといったような、制約を受けることも多いと思われる。

著者が勤務していた金沢文庫は、現在は神奈川県立の博物館として運営されているが、中世前期の日本の中心となった鎌倉と、それを取り巻く東国という文化圏が、その蒐蔵史料に反映している希有

な存在である。言い換えれば、金沢文庫史料には時代と地域性が集約されている、といっても過言ではないと思われる。そういう金沢文庫史料を研究することで、鎌倉を中心とする東国の仏教史は、かなりの部分が明らかになるであらう。

ここで紹介する『鎌倉の仏教』の、書名に冠された「鎌倉」の語の意味も、右に述べてきたような問題点に基づくものである。無論、時代的にも鎌倉時代が中心であることは当然であるが、視点としては、「鎌倉」という土地において展開した仏教の様相を、日本仏教史全体の中に位置づけながら語ろうとしたものである。

三

以下に本書の目次を掲げて、全体の構成を示す。

第一章 旧仏教の展開と繁栄

一、開府以前の仏教

二、頼朝の宗教政策と鶴岡八幡宮

三、公家仏教の流入

四、天台宗の動向

五、真言密教の繁栄

第二章 南都仏教の進出

一、西大寺と唐招提寺の戒律

二、東大寺と高山寺の華嚴

第三章 新仏教の成立と展開

一、新仏教の形成

二、浄土宗の成立と展開

三、浄土真宗の成立と展開

四、禅宗の伝来と発展

五、日蓮宗の成立と展開

六、時宗の成立と繁栄

付録 鎌倉の出版事業

右に見るように、三つの章に天台・真言、南都仏教、鎌倉新仏教を配し、それぞれが鎌倉という土地にどういう形で流入したのか、どういうふうに展開したのかを概説している。

第一章では、特に第二節で述べている頼朝の宗教政策、その中心というべき鶴岡八幡宮が、東国仏教の展開に果たした役割りが重要であろう。第三節では、その後の仏教展開の要因となる、種々の法会・阿弥陀堂や法華堂の盛行に言及し、第四・五節では、鎌倉における天台・真言二宗の様相を述べている。天台宗では、栄西の行跡を関東における天台宗の復興と理解すること、真言宗では、金沢文庫においても真言関係が中核を為していることから、それに基づいて称名寺での東密の展開を述べ、また光明真言・密教図像・声明などの盛行に言及している。

第二章は分量的には最も少ないが、全体の論述の上からは、重要な意味を持っている。それは、古代末期から中世初頭における南都仏教の動向が、往々にして先駆的であったり、他宗派に影響を及ぼしたりしているからである。特に律宗の僧は、西大寺系・東大寺戒壇院系を問わず、他宗派との関わりを持っている。本書の立場に關していえば、西大寺叡尊の鎌倉行化と、その弟子忍性の活動は、その後の東国仏教展開に非常に大きな影響を及ぼした。著者もその点

を重視し、称名寺を含む鎌倉の諸寺で展開した戒律、また称名寺三代長老湛睿の戒律研究を述べている。同時に、東大寺の系統である湛睿の華嚴學と、東国に伝播した高山寺明慧の華嚴學の影響を、金沢文庫史料によって考察している。

第三章は、本書全体のほぼ半分を費やして論述されている。それは、鎌倉期に成立し展開した新仏教のすべての宗派が、鎌倉ないし東国を重要な舞台としていることを考えれば、当然の結果であろう。

浄土宗では、隆寛の東国下向、金沢文庫史料から見た諸行本願義の盛行、材木座光明寺開山然阿良忠の活躍と、鎮西派の鎌倉進出などを述べている。特に良忠の活動は、東国における浄土教の展開に、大きな役割りを果たしており、良忠派下も京都と鎌倉で著しく発展する。

浄土真宗では、越後配流を解かれた親鸞が東国に來たことで、浄土宗とは違った念仏が広まった。その詳しい状況は明らかではないが、『教行信証』を撰述するとともに、盛んに布教活動を展開し、門弟を獲得した。しかし結局親鸞は京都に戻り、その後は手紙を以て布教する。とはいえ、鎌倉の門流は大いに活躍したようである。

禅宗については、この時期に活躍したほとんどの禅宗が、鎌倉に往來し、鎌倉の寺院に止住していることもあり、記述内容も当然多くなる。鎌倉期以降の禅の伝来は、四十六伝とか二十四流とか表現されるが、その先駆として京・鎌倉をまたにかけて活躍したのは栄西である。栄西は、天台宗の関東における復活として見られたように、鎌倉においても天台密教の僧として活動している。しかしそこに宋朝禅という、新しい実践方法を導入することで、旧仏教と新仏

納富常天著『鎌倉の仏教』(中尾)

四四六

教の過渡的な存在となり、後世の評価としては、新仏教の先駆と見られたのである。栄西は活動の拠点を鎌倉に置くことで、京都や高野山にも足場を築き、多くの門流を育てることによって、その兼修禅を時代の主流としたのである。栄西の影響を受けたのは、弟子の行勇や栄朝だけではなく、行勇・栄朝の膝下で学んだ、無本覚心や円爾も色濃く影響を受けた兼修禅であった。

一方、蘭溪道隆や無学祖元などのような来朝僧や、道元のようには、いわゆる純粹禅といわれる祖師達も鎌倉の寺院の開山となり、また鎌倉にやって来た。これらの祖師達は、栄西やその門流が、源氏三代の將軍家と関係が深いのに対し、執権北条氏の外護を受け、鎌倉末期からの五山の成立を契機として、臨済禅は飛躍的な発展を遂げるのである。

日蓮宗は、新仏教の中でも、最も東国に縁深い宗派である。日蓮自身が東国安房の生まれであり、立教開宗後の布教活動もほとんど鎌倉を中心としている。日蓮は、栄西とは多少違った形で天台宗の継承であり、法華唱題の宣揚であった。二度にわたる元寇もあって、危機感が高まった時代の中で、日蓮自身も危機感を訴え、伊豆や佐渡に流されるなど、宗派としての法難も多かった。しかし日蓮やその直弟子などの活躍によって、日蓮宗は東国において大きく発展し、京都や他の地方に展開する。

時宗の祖一遍は、生涯を費やした遊行の途次関東を巡り、鎌倉に入ろうとしたが制止され、片瀬(藤沢)で別時念仏を修し、四ヵ月余りの滞在の後に西へ去ったが、後に時宗教団の分裂と共に、藤沢に清浄光寺(遊行寺)が建立され、遊行を了って独住する藤沢上人の居所となった。

四

以上のような鎌倉の仏教事情について、主としてはやはり金沢文庫の史料を中心としながら、論述が進められている。この点は、先に述べたような金沢文庫の存在意義から考えても、当然のことといえる。ただ、本書全体の構成・分量から見れば、言及すべき人物や事象が多過ぎたというべきであろう。言い換えれば固有名詞が多過ぎて、詳細な論述・検討が多少犠牲になっている感は否めない。しかし、それも本書の出版意図から考えれば、止むを得ないところである。むしろ、鎌倉や東国に関わりを持った祖師や事象を、最大限に網羅している点は、初学者の入門書としても、後学の者の手引書としても、十分活用できる特質というべきであろう。

最後に「鎌倉の出版事業」として、正治二年(一二〇〇)から天正十三年(一五八五)にわたる、約四百年間の鎌倉および東国における出版事業について、実際の刊記や史料に残された記録、川瀬一馬『五山版の研究』などの研究書・論文の中で、確認ないし紹介されたものを一覧表にしている。こうした出版事業の経過は、仏教研究の動向を反映、もしくは誘導するものである。しかもそれは、個別に確認された記録を編年体で綴ってみなければ、全体としての理解はできない。本来個々の研究者が確認すべきことではあるが、こうしたものが一覧表として紹介されることは、関連研究に大いに資するものである。

五

以上は極めて簡単な紹介であって、本書の価値も問題点も、十分

には指摘し得ていない。むしろ著者自身が「あとがき」で述べているように、今後に残された課題として、新旧両仏教の交渉について、その実態が明らかにされねばならない。本書の中でも、栄西については、天台宗の復興を目指した立場と、宋朝禅の導入者としての立場を述べることで、その点に論及したといえるが、そのほかにも真言と禅、律宗と禅など、禅宗を取り巻く諸宗との交渉は、課題として残っている。

ともあれ本書は、著者の長年にわたる金沢文庫史料の研究を背景とし、鎌倉および東国という限られたフィールドの中での仏教の展開を、宗派を限らずに捉えるという視点を持ち、今後別のフィールドでも為されるべき研究の、ひとつの雛型にもなり得るものである。

(かまくら春秋社、昭和六十二年十月八日発行、B6版、本文三〇一頁、索引二二頁、一八〇〇円)